

古代東国の地域学的研究

— 関東における柿本人麻呂に関する事蹟 —

群馬県立女子大学
群馬学センター リサーチ・フェロー

樽本高壽 五島高資

はじめに

柿本人麻呂信仰に関連する社寺等は、全国に 401 箇所あり、西日本に 330 箇所（中国地方に多い）、東日本（愛知県以东）に 71 箇所がある。東日本においては多い順に、栃木県の 19 箇所、群馬県 11 箇所、東京都 11 箇所があり、北関東、特に両毛地区に 30 箇所が集中しているが、その理由は未だ解明されていないため、今回、関東における人麻呂信仰を調査し考察した。

また、関東における人麻呂信仰に関連する社寺等の地理的環境から、人麻呂信仰と水運の関係について調査し考察した。

次に人麻呂信仰と関東における古代製鉄の関係について調査し考察した。

1. 柿本人麻呂について

(1) 人麻呂の概略

柿本人麻呂は、『万葉集』の代表的歌人であり、『柿本人麻呂歌集』や『万葉集』に収載された和歌の数は大伴家持と双璧をなし、その優れた文学性によって歌聖と称されている。しかし、人麻呂自身の生年や没年をはじめその実像には多くの謎が残されている。

(2) 柿本氏の出自

「柿本」という氏は、『古事記』に次のように記されている。

兄天押帯日子命は、春日臣、大宅臣、栗田臣、小野臣、柿本臣、耆比韋臣、大坂臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟耶臣、都怒山臣、伊勢飯高君、耆師君、近淡海国造の祖なり。

これによれば、「柿本氏」は、第五代天皇・孝昭天皇の第一皇子である天押帯日子命（孝安天皇は同母弟）を祖として、春日氏や小野氏などと同族ということになる。

『日本書紀』には、「天足彦国押人命（天押帯日子命）は、これと和珥臣の始祖なり」とあり、柿本氏は和珥（和邇）氏の後裔ということになる。

ちなみに「カキノモト」は「垣ノ本」であり、宮廷と外界とを結ぶ辺境「垣」にあって霊物の擾乱を呪言や「ことわざ（神授詞章）」によって鎮める家柄を示すという折口信夫の説がある。

(2) 人麻呂の生い立ち

人麻呂の生い立ちについては諸説あるが、ここでは神田秀夫氏の説を紹介する。

それによれば、『続日本紀』の和銅元年（708）に「従四位下柿本臣佐留卒」とあるのは、『日本書紀』の柿本臣媛のことであり、彼が人麻呂の父と推定されている。人麻呂は、天智6年の丁卯（667）に生まれたため最初は丁麻呂と名付けられたが、丁の字を傾けて人となして人麻呂と改名されたという。

柿本氏の本貫地については、奈良県内にいくつか候補地があるが、和珥一族の中心地であり、柿本神社がある天理市櫛本が最有力地と考えられている。

人麻呂が6歳の時、壬申の乱が起り、墨坂にあった父・柿本媛は、大海人皇子の軍勢に加勢し、父の出征を見送ったと考えられる。大海人皇子（のちの天武天皇）が壬申の乱に勝利すると、柿本媛はその軍功によって天武朝で優遇され、五位相当の官途に就任した。もともと皇室に繋がる家系と雖も、人麻呂が育った場所は、東に大物主大神を祀る三輪明神・大神神社、西に阿治須岐高日子根命（味耜高彥根神）、迦毛之大御神、住吉大神などを祀る高鴨神社、南に役小角とゆかりの葛城一言主神社があり、いずれも国津神系の信仰が強い土地柄ということもあり、特に大物主大神と葛城一言主大神の影響が人麻呂に及んだと神田秀夫氏は推測している。例えば「神ながら事挙げせぬ国、しかれども辞挙げぞ吾がする」（『万葉集』3253）という人麻呂が詠んだ長歌の一節にそれがうかがえるという。そのあたりに土着の民俗的信仰への親和性が培われた可能性がある」と指摘されている。

ちなみに人麻呂は和銅元年（708）に没したと推定されるが、同年に父・媛も亡くなっている。つまり、人麻呂は生涯、父の実家に部屋住みの身分だったらしい。柿本若子と呼ばれる所以でもある。

(3) 人麻呂の東国下向

持統初年に、時の皇太子であった草壁皇子（日並皇子）の舎人として出仕するも、持統3年（689）4月13日に草壁皇子が薨去し、同4年7月5日まで、人麻呂は舎人失業時代を過ごすことになる。実は、その間の持統3年（689）8月11日と翌4年2月25日に、帰化した新羅人をそれぞれ下毛野国と武蔵国へ送ったことが『日本書紀』に記されており、そのいずれかの際に人麻呂が随行して東国へ趣いた可能性が高いことを神田秀夫氏は指摘し、「上つ毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそまされ」（『万葉集』3417）の東歌についても、その時に人麻呂が埼玉の津に近い伊奈良沼（群馬県邑楽郡板倉町）で詠んだと推定している。

(4) 宮廷伶人としての活躍

持統4年後半から持統朝と文武朝の宮廷伶人として活躍し、多くの名歌を残している。

また、持統5年～7年のいずれかの秋に筑紫、石見を訪れたと考えられている。

(5) 人麻呂流罪伝説と貴種流離譚

若子と老翁の対照的イメージを持つ人麻呂には、貴種流離譚が少なからず残っている。例えば『前々太平記』には、「天武帝ノ朝ニ、仔細アツテ上総国山辺郡ニ配流セラル」、『人丸秘密抄』には「文武天皇后勝八尾大臣の娘を犯し、上総国山辺郡に流罪される」と記されている。後者では、のちに和歌の選者として都へ召還されたとき名を「赤人」と変えたことが記されている。

(6) 人麻呂の終焉

人麻呂が没した時や場所は諸説あるが、確定はしていない。ちなみに神田秀夫氏によれば、人麻呂は、和銅元年（708）、大和と河内の国境にある葛城山に斃れたと推定されている。また、大和岩雄氏によれば、人麻呂終焉の地はやはり葛城山系の峡谷、鴨山を源流とする石川の谷と推定されている。

これらの説を傍証する和歌を以下に列挙する。

柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて臨死らむとせし時、自ら傷みて作れる歌一首
鴨山の岩根しまける吾をかも知らねと妹が待ちつつあらむ

柿本朝臣人麻呂の死りし時、妻依羅娘子の作れる歌二首
今日今日とわが待つ君は石川の貝に交りてありといはずやも
直にあふはあひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ

阿遲須枳高日子命は、『出雲国風土記』では「石川を渡り坂上に至り」「葛城賀茂社に坐せり」と記され、『古事記』にも「迦毛大御神」と書かれている。前掲の和歌における「鴨」と「石川」は、葛城の高鴨の神である阿遲須枳高日子命と深く関わっていることが分かる。なお、阿遲須枳高日子命は、阿遲鉏高日子根神、阿遲鋤高日子根神、味耜高彦根命とも書かれ、「鉏」「鋤」「耜」は全て鉄製の農機具である。

2. 関東における人麻呂信仰

(1) 概要

平成23年(2011)から平成24年(2012)にかけて犬養万葉記念館に協力する会が全国の人麻呂信仰に関する神社・寺・塚など121件を対象に人麻呂信仰について調査した結果をまとめると以下の如くである。

- ① 人麻呂の名前から「ひと産まる(安産)」や「火気のもと、火止まる(消火)」の信仰が誕生し、全国に柿本神社が建立された。
- ② 総本山というべきは島根県益田市高津の柿本神社、そこから勧請した神社が多い。

③ 神徳は以下の如くである。

1)偉大な柿本人麻呂、2)安産の神、3)火伏せの神、4)和歌の神、和歌三神(住吉明神・玉津島明神・柿本人麻呂)の一つ、5)学業(入試)・音曲、技芸の神、6)人麻呂の出生地、死亡地による神、7)腹痛・疫病の神(ほとんどが山口県内)、8)和紙作りの神、9)田の神、10)水難防止、11)鋳物師・木地師の神、12)漁業の神、13)商売繁盛の神、14)藩主参勤交代の道中安全(毛利藩)

これらの事例から、人麻呂信仰の根底には、「人」「火」「水」「歌」という要素が視られる。

「人」・・・安産

「火」・・・消火、鋳物師(鍛冶)

「水」・・・水難防止、漁業、道中安全・商売繁盛(水運)、田の神(水神)

「歌」・・・和歌・学業

(2) 人麻呂信仰に関連する社寺等

① 全国における分布

犬養万葉記念館に協力する会編『神になった柿本人麻呂 人丸信仰の調査と報告書』の「柿本人麻呂、人丸を祀る神社・寺・塚一覧 395 件」、古橋信孝『柿本人麿』「資料 柿本人麿関係神社一覧」、及び筆者の独自調査によって確認された全国における人麻呂信仰に関連する社寺等の分布をまとめたものが図1である。

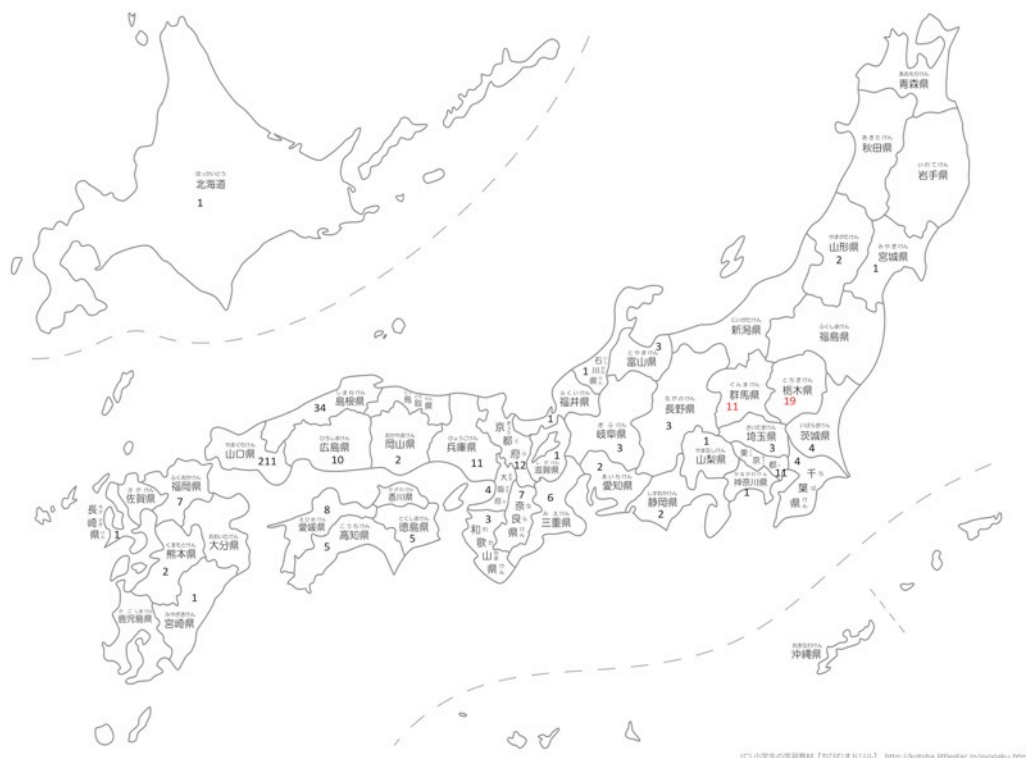


図1 全国における人麻呂信仰に関連する社寺等の分布図

全国における人麻呂信仰に関連する社寺等は、全国に 401 箇所あり、西日本に 330 箇所（中国地方に多い）、東日本（愛知県以東）に 71 箇所が確認された。東日本における人麻呂信仰に関連する社寺等は、各都県別に、多い順から、栃木県に 19 箇所、群馬県に 11 箇所、東京都に 11 箇所が確認され、北関東、特に両毛地区に集中していることが判明した。

なお、中国地方に人麻呂信仰に関連する社寺等が多いのは、次のような理由が考えられた。

- 1) 柿本氏の始祖・和邇氏関連の氏族が石見に多くいたこと。
- 2) 「柿本朝臣人麿の石見国より妻に別れて上り来し時の歌二首并せて短歌」と題詞のある長歌（131）に「石見の海 角の浦廻を 浦なしと」とあり、人麻呂が石見を訪れたことが推定されること。ちなみに、角の浦・津濃郷の豪族・津濃氏は近江・宇都宮氏の後裔とされている。
- 3) 人麻呂歌集の一首「君がため浮沼の池の菱摘むと我が染めし袖ぬれにけるかも（1249）」に詠まれた「浮沼の池」は島根県大田市三瓶町池田の三瓶山麓にある浮布池と比定され、持統 5 年（691）～同 7 年（693）に人麻呂が石見を訪れた証左とされていること。
- 4) 万葉集に「柿本朝臣人麿の筑紫国に下りし時に、海路にして作れる歌二首」と題詞のある短歌（303、304）が収載されており、筑紫・長門から石見へ立ち寄ったことが推測されること。
- 5) 石見に多い鋳物師が人麻呂を鍛冶の神として信仰したこと。

② 関東における人麻呂信仰に関連する社寺等

関東における人麻呂信仰に関連する社寺等の一覧を表 1 に示す。「柿本人麻呂関係社一覧」（桜井満『柿本人麻呂論』桜風社、1980）と「柿本人麻呂、人丸を祀る神社・寺・塚一覧」（犬養万葉記念館に協力する会『神になった柿本人麻呂・人丸信仰の調査と報告書』）をもとにしたが、今回の調査で新たに判明したものも若干追加した。

群馬県

社寺等	備考	住所	
雷電神社	伊奈良沼	群馬県邑楽郡板倉町板倉 2334	◎
若宮八幡宮	人麿社	群馬県高崎市下豊岡町甲 1428	◎
紅雲巖島神社	柿本人丸大人合祀	群馬県前橋市紅雲町 2-16-12	◎
大室神社		群馬県前橋市東大室町 715-1	◎
小暮神社		群馬県前橋市富士見町小暮 815	◎
赤城神社		群馬県前橋市富士見町赤城山 4-2	◎
大東神社		群馬県佐波郡東村東小保方町 3297-2	◎
砥沢神社	柿本朝臣人麿配祀	群馬県甘楽郡南牧村砥沢 277 番	◎
妙義神社	人丸神社	群馬県富岡市妙義町妙義 6	◎
武尊神社	柿本人丸朝臣合祀	群馬県利根郡片品村花咲 2021	◎
八幡宮	人麻呂社	群馬県利根郡昭和村川額 1007	◎

栃木県

社寺等	備考	住所	
四社神社	柿本神社	栃木市藤岡町赤麻 4794	○
春日神社	人丸神社	栃木県栃木市大平町横掘 339	○
雷電神社	人麿大明神	栃木県栃木市大平町牛久 400	○
浅間神社	ヒトマルサマ	栃木県栃木市大平町西水代字瓜畑	○
人丸石		栃木県栃木市薮部町 2	○
人丸神社		栃木県佐野市小中町 1061	○
人丸神社		栃木県佐野市山形町 1223	○
涌釜神社		栃木県佐野市出流原町 2123	○
鹿島神社		栃木県佐野市田沼町戸奈良町 2008	○
八幡神社		栃木県佐野市黒袴町 586	○
二荒山神社		栃木県宇都宮市馬場通り 1 丁目 1-1	△
人丸神社		栃木県日光市手岡 103	○
人丸神社		栃木県日光市猪倉 250	△
人丸神社		栃木県さくら市松山新田 300	△
加蘇山神社		栃木県鹿沼市上久我 1697	○
示現神社		栃木県那須烏山市谷浅見 592	□
玉津島神社		栃木県那須郡那須町大字寄居 2082	□
春日神社	人丸神社	栃木県足利市山下町 1778	○
人丸神社		栃木県足利市野田町 1811	○

茨城県

社寺等	備考	住所	
人丸神社		茨城県常総市羽生 224	△
人丸神社		茨城県常総市大輪 177	△
香取神社		茨城県常総市石下町向石下 15	△
草薙神社	太平洋沿岸	茨城県ひたちなか市海門町 1-1-8	◇

埼玉県

社寺等	備考	住所	
氷川神社	柿本人麿神社	埼玉県川越市宮下町 2 丁目 11-3	◎
上南畑神社		埼玉県富士見市上南畑 295	◎
上之村神社	柿本人丸合祀	埼玉県熊谷市上之 16	◎

千葉県

社寺等	備考	住所	
-----	----	----	--

人丸神社		千葉県成田市小泉	△
下立松原神社	太平洋沿岸・合祀	千葉県南房総市白浜町滝口 1728	◇
二宮神社	人麿神社	千葉県船橋市三山 5-20-1	○
意富比神社	柿本人麿社	千葉県船橋市宮本 5 丁目 2-1	○

東京都

社寺等	備考	住所	
浅草神社	人麿社	東京都台東区浅草 2-31	*
八幡神社	人麻呂社	東京都港区虎ノ門 5	*
神田神社	柿本人麻呂神社	東京都千代田区外神田 2	*
月読神社	人丸明神	東京都墨田区向島 2-5-17	*
目白不動尊	人丸社	東京都文京区関口 2-5	*
牛島神社	人丸大明神	東京都墨田区本所 2-2-10	*
中央寺	人丸大明神	東京都江東区南砂 4-15-20	*
白山神社	人麿大明神	東京都文京区白山 5 丁目 31-26	*
人丸社		東京都江東区牡丹 3 丁目	*
法輪山浄光寺	人麻呂祠	東京都荒川区日暮里 3-4-3	*
牛頭天王社	柿本神詠之碑	東京都品川区北品川 3-7-15	*

神奈川県

社寺等	備考	住所	
人丸塚		神奈川県鎌倉市大町 3-1-23	◇

静岡県

社寺等	備考	住所	
阿豆佐和気神社	柿本社	静岡県熱海市西山町 43-1	◇
吉永八幡宮	人丸神社	静岡県焼津市利右衛門 836	◇

◎：利根川水系河畔、○：渡良瀬川水系河畔、△：鬼怒川水系河畔、□：那珂川水系河畔、◇：太平洋沿岸、＊：東京都内 但し、各河川は、江戸時代の利根川東遷以前の流路とする。

表 1 関東における人麻呂信仰に関連する社寺等一覧表

表 1 に記した関東における人麻呂信仰に関連する主な社寺等（東京都を除く）の分布を地図上に示したのが図 2 である。

祭神：火雷大神、大雷大神、別雷大神、八幡大神、稻荷大神、伊邪那美大神、菅原道真、弁財天

嘉永元年(1848)に建立された「板倉雷電神社祠碑」の銘文(二城留守成島讓撰)によれば、相殿に天水分神と建角身命も祀られていると記されている。なお別雷大神は賀茂別雷命のことであり、『賀茂之本地』では阿遲鉏高日子根神と同一とされている。

明治34年(1901)に刊行された『上野国百景銅版画集』の「雷電神社之景」(図3)や社伝によれば、この雷電神社は推古天皇6年(598)頃、聖徳太子によって創建され、延暦24年(805)には坂上田村麻呂が桓武天皇の許しを得て社殿を造営したとされている。なお、同版画に描かれた神社は周りを沼と水路で囲まれており境内は島の様相を呈している。なお、三の鳥居は、両部鳥居であり、水神信仰の形跡が認められる。

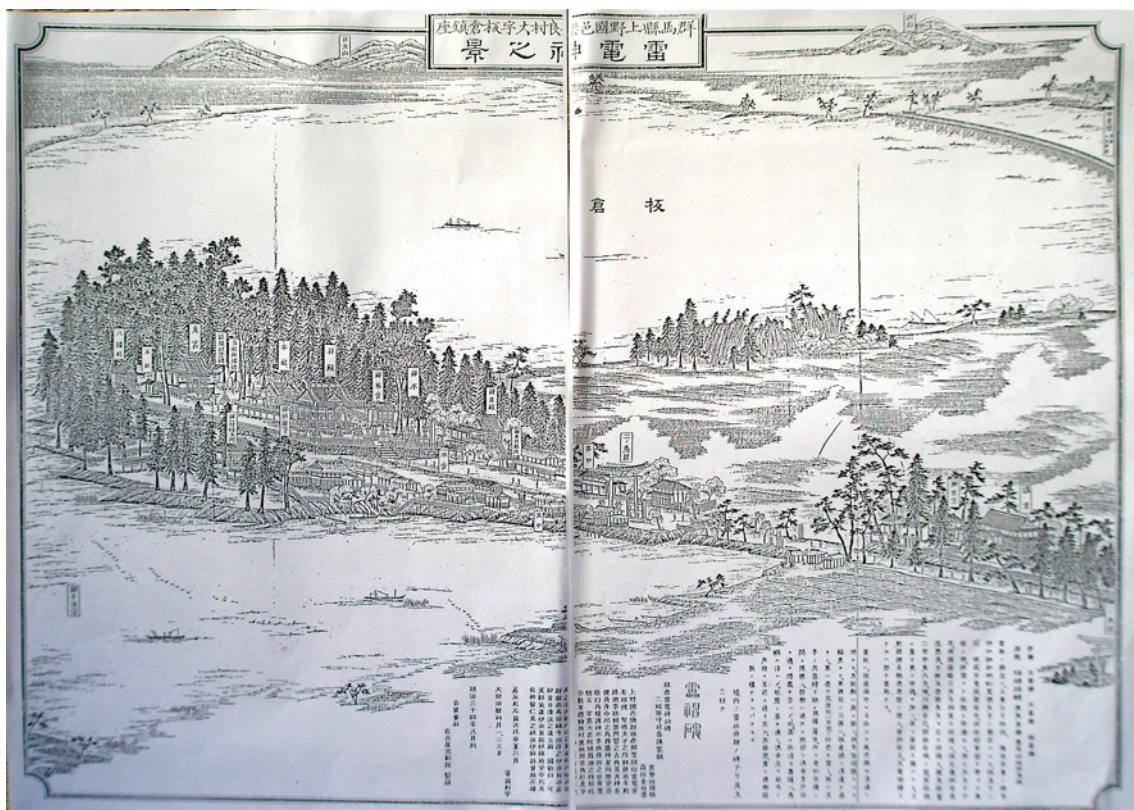


図3「雷電神社之景」『上野国百景銅版画集』

また、奈良時代、『万葉集』に柿本人麻呂が詠んだとされる伊奈良沼(写真1)が境内に残っており、現在もその水辺に人麻呂が歌に詠んだ「大藺草」と同じ太藺などの水生植物が繁茂している。

可美都氣奴 伊奈良能奴麻能 於保爲具左 與曾爾見之欲波 伊麻許曾麻左禮 3417
柿本朝臣人麿歌集出也

上毛野伊奈良の沼の大藺草よそに見しよは今こそ勝れ

昭和初期の干拓以前は水路を介して利根川や渡良瀬川と繋がって水郷地帯をなしていたという。伊奈良沼の畔に「板倉雷電神社祠碑」の銘文が刻まれた「雷神碑」(写真2)が建てられている。

境内社に祀られている「西の神馬」(写真3)は、目の御守護として眼病に効験があるとされている。

本殿には仙境や竜宮伝説を題材にしたと考えられる彫刻が施されているが、そこでは浦島太郎と思われる人物が亀ではなく鰐に跨がっているのが描かれている。これは江森隆裕宮司の指摘で判明したことである。(写真4)

水郷板倉の川魚として代表的な鯰は神の使いとして畏敬の対象となっている。社務所には、鯰の置物(金属製)が置かれている。(写真5)



写真1 伊奈良沼



写真2 雷神碑



写真3 西の神馬



写真 4 雷電神社本殿の彫刻



写真 5 雷電神社社務所の「なまずさん」

② 紅雲巖島神社

所在地：群馬県前橋市紅雲町 2-16-12

祭神：市杵島比売命、柿本人麻呂、水波能売命

創建は、元弘元年(651)と伝えられ、利根川とも近く水神信仰と深く関わっている。神仏混交の昔は境内に観音堂と地藏堂もあったという。

神社の裏手には水路が通っており、境内には、「柿本人麻呂万葉歌碑」(写真 6)が残っており、以下の歌が刻まれている。

おくやまのいわがき沼のみこもりに恋ひやわたらむ逢ふよしをなみ 『拾遺集』

この歌碑の横には、猿田彦命と月夜見命の文字塔があり、庚申信仰の名残を思わせる。



写真 6 柿本人麻呂万葉歌碑

③ 大東神社

所在地：群馬県佐波郡東村東小保方町 3297-2

祭神：事勝国勝長狭命、大日靈命、菅原道真命、大雷命、櫛御気野命、木花咲翁比売命、市杵島比売命、素盞鳴命、大物主命、大山昨命、大山祇命、迦具土命、宇気母智命、日本武命、伊邪那岐命、柿本人麿命、大己貴尊、埴土安媛命、誉田別命

口碑によると、崇神天皇の御代、皇子・豊城入彦命の東夷征討に際して、その武臣によって創建されたという。利根川の支流である早川に近く、神社の南西は水路で囲まれており、南方の池には小島が浮かんでいる。(写真 7)



写真 7 大東神社南方の池

④ 武尊神社

所在地：群馬県利根郡片品村花咲 2021

祭神：穂高見命（実高明神あるいは保宝明神）、日本武尊、柿本人麻呂

建治 2 年(1276)の創建と伝えられ、利根地方の武尊神社の総鎮守である。明治 41 年、神社統合により村内の 28 社が合祀される。御神体は黄金の御幣で、毎年、旧暦九月申の日に奇祭「猿追い祭」が行われる。猿に扮する主役は、小字鍛冶屋・山崎の星野姓の者に限られる。

康平 5 年(1062)、この地へ配流となった尾瀬次郎定連の奥方が里芋を踏んで滑り、胡麻の茎で目を痛め、その後、病気となり九月申の日に亡くなったという伝説が残っている。

⑤ 四社神社（柿本神社）

所在地：栃木市藤岡町赤麻 4794

祭神：市杵島姫命、稲倉魂命、大雷命、柿本人丸公

口碑によれば、永承 5 年(1050)に創立されたと伝えられる。境内社には、天満宮、浅間神社、愛宕神社、大杉神社がある。明治 12 年（1879）に奉納された扁額には、稲荷神社、雷電神社、巖嶋神社、柿本神社の名が書かれている。(写真 8) また、神社の前には葦原と渡良瀬遊水池が広がっている。(写真 9)

なお、同社のすぐ近くには大前製鉄遺跡（図 5）があり、昭和初期には 100 基ほどの炉

跡があったという。



写真 8 四社神社の扁額



写真 9 四社神社前の葦原と渡良瀬遊水池

⑥ 春日神社（人丸神社）

所在地：栃木県栃木市大平町横掘 339

祭神：天児屋根命、建御雷命、経津主命、比売神、柿本人麻呂

本殿の西側に人丸神社（写真 10）があり、境内は環濠（写真 11）に囲まれている。かつては渡良瀬川水系の永野川へと水路で繋がっていたと考えられる。



写真 10 人丸神社（春日神社境内）



写真 11 春日神社の環濠

⑦ 人丸神社（写真 12）

所在地：栃木県佐野市小中町 1061

祭神：柿本人麻呂

宝物：柿本人麿公御神影

元慶元年(877)3月、里人によって勧請され産土神として祀られたという。当社は下野に八社ある柿本人麻呂を祀る神社の総社とされ、人丸を「火止まる」に掛けて火伏の神として信仰されている。また、本殿の北側に泉水が湧いており、境内に湧泉池（写真 13）を形成して水神としても信仰されている。かつては片葉の葦が繁茂していたという。なお、この湧水は渡良瀬川水系・才川（斎川）の源泉となっている。社伝によると、この地を訪れて柿本人麻呂が詠んだものとして次の和歌が伝わっている。

下野の安蘇野の原の朝あけにもやかけわたるつづら草かな 柿本人麻呂（伝）



写真 12 人丸神社（佐野市小中）



写真 13 人丸神社湧泉池

⑧ 二荒山神社

所在地：栃木県宇都宮市馬場通り1丁目1-1

祭神：豊城入彦命、大物主命、事代主命、柿本人麻呂（伝）など。

創祀年代は不詳であるが、社伝によれば豊城入彦命の四世の孫・奈良別王が仁徳天皇の代に現在の摂社「下之宮」の地（荒尾崎）に祖神・豊城入彦命を祀ったのがはじめといい、承和5年(838)、奈良別王の子孫・温左麿が荒尾崎より現在の臼が峯へ遷座したという。神社周辺はかつて湖沼が多く、すぐ近くを鬼怒川水系の釜川が流れている。

『和漢三才圖會』には、柿本人麻呂霊が主祭神と記されている。『下野国誌』はそれを否定しながらも、御神体とされた人麻呂の画像（図4）が掲載されている。

なお、当社には、南北時代の作という鉄製の三十八間星兜（写真14）と、建治3年(1277）銘の鉄製狛犬（写真15）があり、共に国の重要美術品に指定されている。

毎年10月～11月に、ふいご祭が開催され、奉納された玉鋼（写真16）が展示されている。



図4 柿本朝臣人麻呂之画像



写真 14 三十八間星兜



写真 15 鉄製狛犬



写真 16 玉鋼

⑨ 示現神社

所在地：栃木県那須烏山市谷浅見 592

祭神：事代主命、味耜高彥根命（阿遲鉏高日子根神）、木花開耶姫命、火産靈命、大日靈命、柿本人麻呂

社伝によれば、正慶2年(1333)に創建。建武2年(1335)、松野二荒山神社より日光三社大権現一神を勧請し、天文13年(1544)、二荒神から二現神となり、その音読みにて示現大明神と称されたという。

本殿の脇には小さな滝があり、日月さんという二つの池に注いでいる。

本殿内には、柿本人麻呂肖像（写真 17）とその和歌「ひんがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたむきぬ」の墨書（写真 18）が飾られている。



写真 17 柿本人麻呂肖像

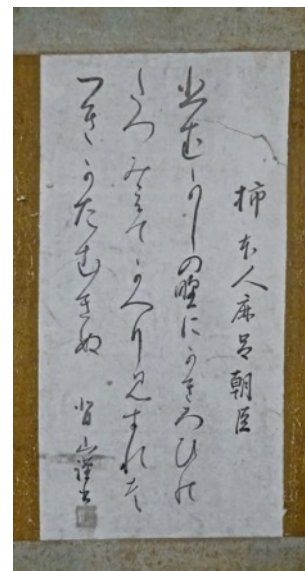


写真 18 人麻呂和歌墨書

(3) 人麻呂信仰のまとめと考察

① 人麻呂信仰の伝播

全国における人麻呂信仰に関連する社寺等の分布には偏りがあり、その多くが西日本、特に山口県や島根県に多い傾向にある。東日本においては、西日本より少ないが、関東、特に群馬や栃木などの北関東に多い傾向にある。

関東における人麻呂信仰に関連する社寺等の分布を見ると、その多くが利根川水系、渡良瀬川水系、鬼怒川水系の河畔に多いことが分かる。また、太平洋沿岸にも散在していることから人麻呂信仰は、海路や水路を介して関東へ移動してきた集団によってもたらされた可能性が推測される。

② 水神としての人麻呂

『神になった人麻呂 人丸信仰の調査と報告書』などで指摘されているように、人麻呂は、水難防止、漁業、道中安全・商売繁盛、豊作に関わる水神として祀られている。

平安時代に始まる「柿本影供」では人麻呂の肖像が信仰の対象となるが、その裏には必ず次の歌が書き込まれているという。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞ思ふ

これは『古今集』にあり、「よみ人知らず」の歌であるが、左註には「ある人曰く、柿本人麻呂の歌なり」とあり、和歌の中でも特に呪力のある歌とされていたらしい。この明石の浦の歌は、土佐の幡多郡では、正月の船乗り祝事に船歌の初歌として唱えられる。また、冷泉家伝の『古今集注』の序注に「口伝に言ふ、人丸は妙音菩薩の化身也」とある。妙音菩薩は弁財天の垂迹と考えられていることから、三谷栄一は、「人丸＝妙音菩薩＝弁財天が海運・漁業と関係があったことは、中世運漕を司った弁済使との関係だけでない信仰があったことを思わせる」と指摘している。なお、航海安全を祈願して歌われる人麻呂の歌には「大舟にま梶しじぬき海原を漕ぎ出て渡る月人をとこ(3611)」があり、『万葉集』に「柿本朝臣人麿歌」と左註がある。また、明石の月照寺には、人麻呂の霊夢を見た僧覚証が大和国柿本寺より十一面観音を勧請し観音堂を建てて航海安全の守護とし、同時に人麻呂の祠堂を建立された。これらのことから人麻呂が仏教思想と習合され航海安全を司る信仰の対象となったことが推測される。

なお、『超大極秘人麿伝』には「伊弉諾尊、小戸の祓させ給ひて、心身ともに清浄にならせまして生ます御神の御正体故、人丸を信仰すれば、則心中清くなる也」とある。ここで中西進が指摘するように明石を異界からの死と再生の場所とするならば、島隠れを詠んだ明石の浦は黄泉平坂と重なることから、人麻呂が、黄泉がえり、つまり再生の神としての性質を併せ持つことがうかがえる。さらに、時代的に史実とは考えにくいですが、『古今集序問答』には、人麻呂が聖武天皇の後と密通したため明石に流され、三年後に召還されたとき、名を「赤人」に変えたとある。人麻呂が、「人丸」が「人生る」に、また「赤人」が赤子に通じるから安産の神として信仰されていたこととも関連すると考えられる。

このように、人麻呂を水神と見れば、関東において人麻呂を祀る社寺が太平洋沿岸やそこから溯る利根川などの河畔に多いことも理解できる。人麻呂自身が実際に関東へ下向したということは史実として認められていないが、人麻呂を水神として信仰する海部の人々がそれらに関わっていたことは大いに考えられる。

例えば、前述した雷電神社がある板倉周辺はまさに奈良時代以降の関東における利根川および渡良瀬川水運の拠点であり、人麻呂が詠んだとされる伊奈良沼と比定される湖沼もあり、人麻呂関連地として重要な位置付けを占めるものと考えられる。また、同社に伊邪那美大神と弁財天が祀られていることや本殿に彫られた浦島太郎が亀でなく鰐（柿本氏の祖・和邇氏を連想させる）に跨がっていることなどもそれを支持するものとして大変興味深いものがある。また、関東において人麻呂を祀る社寺の多くが環濠に囲まれており、厳島神社に見られる両部鳥居が多く見られることなども人麻呂が水神と関係深いことを示していると考えられる。

③ 雷神としての人麻呂

『万葉集』巻第三の冒頭に「天皇、雷岳に御遊しし時、柿本人麻呂の作れる歌一首」として「大君は神にしませば天雲の雷の上にいほらせるかも(235)」という歌がある。この大君とは、持統天皇と推測され、人麻呂は「柿本」という巡遊伶人を輩出した家に生まれ、巫祝の持つ伶人としての資質を以て宮廷に奉仕した「宮廷伶人」というべき存在であったと考えられる。天皇の下に親しく仕えた人麻呂の立場と雷の位置が重なって見えてくる。

また、『人丸秘密抄』によれば、人麻呂が文武天皇后勝八尾大臣の娘を犯したために上総国山辺郡に流罪となり、後に都へ召還されたときに名を「赤人」に変えたと記されている。その他にも前述した『古今集序問答』の記事も含めて、人麻呂が遠国へ配流となったという伝説が幾つか残されている。人麻呂の官位は高くなかったというのが通説であるが、『古今集』では正三位とあり、また、宮廷伶人の立場を考えると高官であったのは間違いないだろう。そうすると人麻呂の配流伝説は、一種の貴種流離譚と捉えることが出来る。敷衍すれば、古くは、高天原より放逐された荒ぶる神であり和歌の創始神であるスサノヲ、下っては、讒言により太宰府に流されて怨霊となり、後に学問の神とされた菅原道真などとの類似が想起される。つまり、いずれも御霊神と捉えられ、それらがしばしば化現して雷神として祀られることから人麻呂もまた雷神と関係が深いことが考えられる。なお、前述した雷電神社の雷神はもとより、建御雷命や阿遲鉏高日子根神も人麻呂と一緒に祀られているところが多いのも特筆される。

ところで、ギリシア神話の雷神キュクロプスは一眼の巨人、北欧神話の雷神トルの父オーディンも独眼であり、共に鍛冶神でもある。後述するが、柳田國男は、人麻呂が栃木県小中で目を負傷して片眼になったという伝説を「一目小僧」および「目一つ五郎考」に記している。ちなみに、柳田は鍛冶神である天目一箇神も雷神ではないかと推測している。

④ 鍛冶神としての人麻呂

前述した佐野市小中の人丸神社に関して、柳田國男は次のような伝説を紹介している。

旗川村（現在・佐野市）大字小中の人丸神社に於いては、柿本人丸手負いとなって逃げ来り、小中の黍畑に逃げ込んで敵を遣り過ごして危難を免れたが、其折に黍稈の尖りで片眼を潰し此地に滞在した。そこで村民霊を神に祀り、且つ其為に今に至るまで、黍を作ることを禁じて居るといふ

この伝承は、関東に下向した人麻呂が片眼となったことを示唆しているが、前述したように鍛冶神に独眼が多いことを考えると、人麻呂もまた鍛冶神の特質を備えていたと言える。なぜ鍛冶神が独眼かというと、溶鉱炉からの輻射熱や火の粉などによる目の損傷は神意によるものとして古代人が神聖視したからではないかと細矢藤策は『古代英雄文学と鍛冶族』に述べている。

また、宇都宮二荒山神社や那須烏山市谷浅見の示現神社についても柳田は、大物主命と柿本慈現大明神が共に祀られていることに言及し、共に鍛冶神であることを指摘している。

現在の示現神社は人麻呂と共に味耜高彥根命（阿遲鉏高日子根神）が祀られているが、この神も「耜」「鉏」から示唆されるように鉄製農具に関する農業神であり、やはり、鍛冶に関係している。また、延宝6年(1678)の橘三喜『一宮巡記』には、宇都宮二荒山神社に三社あり、大己貴命、事代主命、味耜高彥根命が祀られていると記されており、この時期、大己貴命と味耜高彥根命という鍛冶に関する神が祀られていたことが分かる。

なお、日光二荒山神社には、男体山＝大己貴命、女峯山＝田心姫命、太郎山＝味耜高彥根命が祀られている。宇都宮二荒山神社における現在の祭神である大物主命(＝大己貴命)や、かつて祀られていた味耜高彥根命の名も見える。日光二荒山神社の社伝によれば、男体山の二荒神（大蛇）と赤城山の赤城神（百足）が戦いとなった際に、二荒神の子孫である小野猿丸の援助により二荒神が勝利したという。大蛇と百足はともに坑道の象徴であり、共に鉏山神であることが示唆される。戦いの原因は、中禅寺湖畔に産する砂鉄資源の争奪にあったと伝えられている。梅原猛は、著書『水底の歌-柿本人麻呂論』で柿本人麻呂と猿丸大夫は同一人物であると推論しており、やはり、製鉄鍛冶に人麻呂が関与していた可能性がうかがえる。

ちなみに、隻眼の神が眼疾を癒す神として祀られることも多く、板倉雷電神社にある「西の神馬」が目の御守護として眼病に効験があるとされていることにも関係しているかもしれない。

3. 人麻呂信仰と関東における古代製鉄

関東における古代鉄器文化の創始についての文献的資料としては、「慶雲元年(704)に、国司の姦女朝臣が、鍛冶師の佐備大麻呂らをつれてきて、若松の浜の鉄を採取して剣を造った」という『常陸風土記』の記載が最も古く、これまで奈良時代の鍛冶台遺跡（茨城県鹿嶋市）から鉄滓が出土している。ところが、平成24年(2012)、群馬県渋川市にある金井東裏遺跡から6世紀初頭のものでと推定される「甲を着た古墳人」が見つかり、関東における鉄器文化の創始は古墳時代に溯ることが考えられている。小札甲（小札と呼ばれる小さな鉄板を800枚から1000枚ほどを組紐や革紐などでつなぎ合わせて作られたもの）共に、鉄鏃、鉄矛などが一緒に発見されている。しかし、いずれの周囲からも製鉄炉跡が発見されておらず、七世紀中頃までは、まだ国内で製鉄技術が未発達だったため、主に朝鮮半島から輸入した鉄原料を加工して鉄器を製作していたものと推測される。

ところが、天智2年(633)の白村江の戦い以降、朝鮮半島からの鉄原料の供給が滞ったため、国内鉄資源の開発と製鉄が必要になる。その際、鉄鉱石を原料とした中国北部・朝鮮

からの鑄鉄による製鉄ではなく、インド、ベトナム、中国南部を經由した砂鉄を原料にした鍛造による製鉄技術が移入された可能性が高い。特に関東地方にはチタン含有量が多い砂鉄が多く、比較的低温による還元型の製鉄が必要となるため、鍛造による製鉄技術が適していたと考えられる。従って関東における製鉄遺跡は奈良時代以降のものがほとんどで、中世以降に盛んになる踏鞴製鉄とは異なる自然通風による粘土製の竪型炉（ブルーム炉）が多く用いられたと考えられ、実際に関東地方には竪型炉による製鉄遺跡が多く発見されている。

(1) 関東における人麻呂関連地と製鉄関連地の分布

関東における人麻呂関連地と主な古代製鉄関連地の分布を見てみると両者が水路を介して近接していることが分かる。



図 5 関東における人麻呂関連地と主な古代製鉄関連地の分布

図 5 に示されるように関東における古代製鉄関連地は群馬県と栃木県（両毛地域）に集

注している。考古学的には、金井遺跡の製鉄炉が8世紀中頃、片並木遺跡の製鉄炉と尾崎前山遺跡製鉄炉跡が9世紀代、菅ノ沢遺跡の製鉄炉が平安時代のものと推定されている。いずれも人麻呂が活躍した時期より少し後の頃の遺構であり、また、人麻呂を祀る神社の近傍に位置することから、人麻呂あるいは人麻呂を鍛冶神として信仰する製鉄技術者集団との関連が大いに推測される。なお、高崎市の金井沢碑には、鍛師礒部君身麻呂の名から鍛冶集団の存在が推定され、神亀3年(726)の年号から人麻呂が没して間もない頃の地域社会が反映されているものと考えられる。

(2) 尾崎前山遺跡製鉄炉跡

茨城県結城郡八千代町の尾崎前山遺跡は鬼怒川河畔の台地南東斜面にあり、周りは葦原が繁茂する低湿地となっている。すぐ近くに人麻呂を祀る人丸神社2社と香取神社があり、製鉄に関わった集団と関係していた可能性がうかがわれる。製鉄炉は9世紀に操業されていたと考えられ、近世の踏鞴製鉄とは異なり、南から斜面をかけたのぼる自然送風による竪型炉と推測されている。写真19は、その復元模型、図6は、尾崎前山遺跡の古代製鉄想定図である。



写真 19 竪型炉（復元）

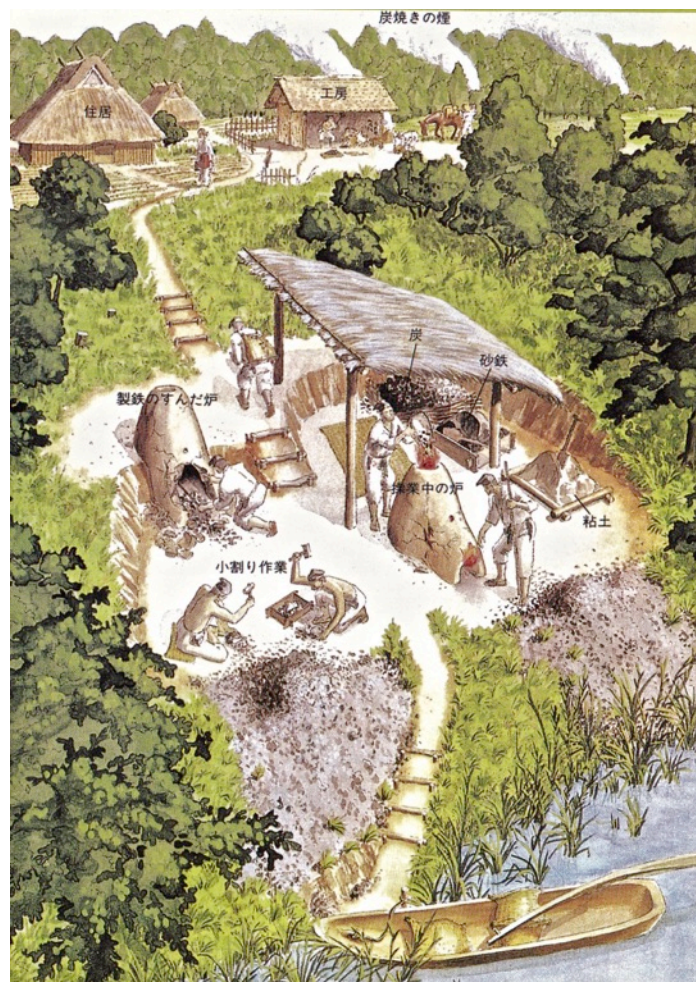


図 6 尾崎前山遺跡の古代製鉄想定図

おそらく利根川水系や鬼怒川水系の河畔にある他の製鉄遺跡においても尾崎前山遺跡の古代製鉄想定図のような製鉄施設によって鉄の精錬が行われていたものと推測される。

(3) 製鉄の原料・湖沼鉄について

前述したように関東における製鉄の原料は砂鉄が用いられたと考えられる。しかし、浅井壮一郎によれば、堅型炉は高温を保てないため、熔融に1,000℃以上の高温を必要とする砂鉄ではなく、比較的低温で熔融する湖沼鉄由来の褐鉄鉱が用いられたと推測している。なお、窪田蔵郎は、鬼怒川や現在の利根川の下流に当たる霞ヶ浦湖畔の茨城県土浦市木田里に産する「鬼板」などの褐鉄鉱が古代製鉄の原料となったのではないかと推測している。この「鬼板」は含鉄板状土の一種であり、葦、藺、太藺、菱、菰、茅などの水生植物の根に鉄バクテリアの作用によって水酸化鉄が固定され長年の堆積により褐鉄鉱（湖沼鉄）となったものである。また、『播磨風土記』宍粟郡の項に「沢に菅が生え」「鉄を産する」と記されており、これも生物由来の湖沼鉄と考えられる。なお、播磨国賀茂郡の式内社「菅田神社」の祭神は天目一箇神であり、前述したように鍛冶神であり、古来より、湖沼鉄は製鉄・鍛冶の原料として用いられていたことが推測される。なお、前述したように人麻呂は伊奈良沼で大藺草を詠んでおり、これも湖沼鉄との関連があるのかもしれない。

また、前述したように古代関東における製鉄は、堅型炉を用いた鍛造製鉄による可能性が高いが、その技術を伝来したのはベトナムや中国南部の海洋民族である「アタ族」であると宮本常一は推定している。白村江の戦い以降、朝鮮半島との交流が途絶えた際に、このアタ族の持つ造船・航海技術が、日本に渡来した可能性も推測されている。彼らは娘媽神女を祀る水上民（蜑民）であり、古代日本において鰐魚を海神と崇める海部との繋がりも指摘されている。なお、沢史生は、娘媽「ニャンマ」の転訛が「ナマズ」だと推測している。雷電神社の本殿に彫られた「鰐」や神格化された「鯰」との関連もここにあるのかもしれない。ちなみに、かつて鯰川と呼ばれた北利根川（現在・常陸利根川）は、外浪逆浦で鰐川と合流して水郷を形成しており、水上交通を生業とした古代水人との関連がうかがえる。また、江戸時代の俳人・宇井貞翁はこの辺りを「髭ほどの芦戦ぎけり鯰川」と詠んでおり、芦と鯰が共存した自然環境の名残を知ることが出来る。

さらに、利根川流域に生息していたと伝えられる「河童」（図7）もまた湖沼鉄を採取することを生業とした水人を象徴するのかもしれない。



図 7 河伯（赤松宗旦『利根川図志』より）

(6) 褐鉄鉱（湖沼鉄）による製鉄の実証

山内裕子は、湖沼鉄を用いて製鉄実験を行って成功している。詳細は「古代製鉄原料としての褐鉄鉱の可能性：パイプ状ベンガラに関する一考察」を参照されたい。以下に当該論文の結語を引用する。

鉄バクテリア代謝生成物であるパイプ状ベンガラは、縄文時代から古墳時代にかけて、九州から北海道に至るまで全国中で使用された。赤色顔料に用いられるが、パイプ状ベンガラの乾燥物は黄色味の強い橙色のため、鮮やかな赤を表現するには800℃程度の高温での加熱が必要となる。

このように、パイプ状ベンガラを加工していたことや、地理的・地質的に比較的容易に採取・入手できること、また北欧では同様のベンガラで実際に古代には製鉄していた事実からも、日本でも製鉄原料に用いた可能性は否定できない。

今回、実際に鉄バクテリア代謝生成物を材料に七輪を用いた還元装置で実験した結果、鉄が生成した。通常たたら製鉄は砂鉄(磁鉄鉱)を用いるが、鉄バクテリア代謝生成物は砂鉄より粒子径が小さく、質量も小さいため高温を維持する時間や炉の高さなど、通常のたたら製鉄とは条件が異なり、炉高も温度もかなり低い状態で製鉄が可能である。

今回の実験後に、ベンガラの量など条件を変えることで写真9のような鉄塊ができた。

これらをいくつか集め、ある刀匠に鍛造(積み沸かし)していただいた結果、鍛接可能な鉄だとわかった。(写真10)



湖沼鉄からの製鉄を成功させたこの実験結果は、北関東における河川や湖沼に産する「鬼板」などの湖沼鉄が古代製鉄の原料として用いられた可能性を実証的に支持するものと考えられる。

(5) 室の八島と製鉄

平安時代中期に編纂された『延喜式』によると、当時の関東諸国における鉄価格（鉄 10 斤の直稻）は、伝統的な鉄産地であった近江・播磨や中国地方の諸国、および調庸の鉄が集まる畿内に比べてやや高い傾向にある。しかし、下野だけは畿内などと同等の価格であり、(図 8) 鍬の価格は畿内より安い傾向にあった。このことは、10 世紀には関東での製鉄が盛んになり、特に下野が製鉄の中心地となっていたことをうかがわせる。承平天慶の乱に平将門が鉄製の武器を調達できたことにも関係しているかもしれない。

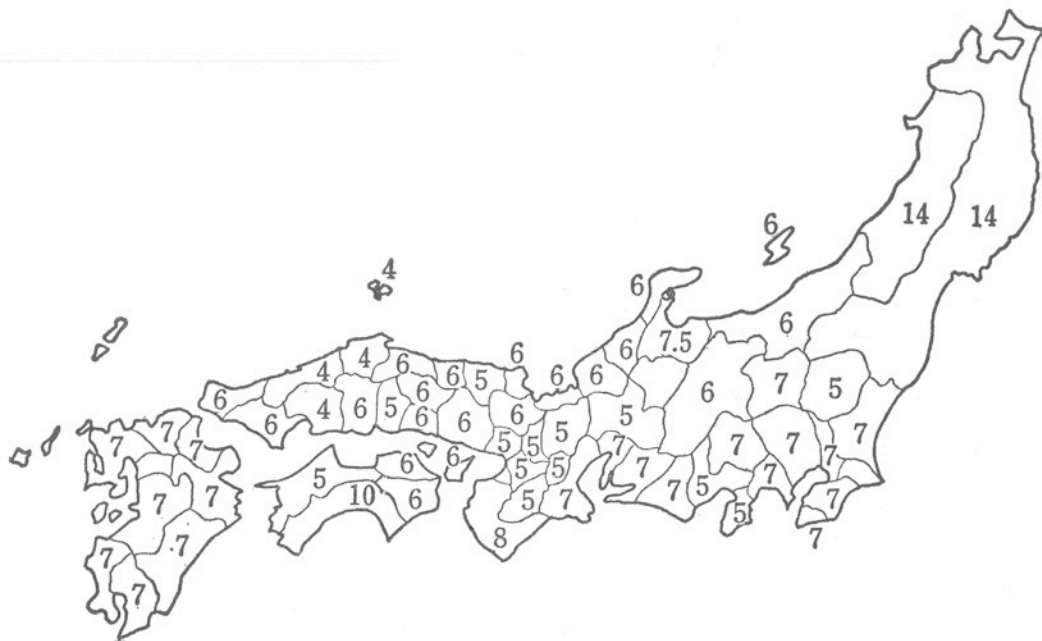


図 8 禄物価法による鉄価格 鉄 10 斤の直稻（単位束）

関東において考古学的に確認された古代製鉄遺跡の多くは上野（群馬県）に見られ、下野（栃木県）には乏しく、わずかに小山市の金山遺跡と大境遺跡に製鉄遺構が知られているのみである。両遺跡ともに9世紀の操業と考えられているが、今回、人麻呂信仰という観点から、栃木県において人麻呂を祀る社寺等の分布の中心にあたる室の八島における古代製鉄の可能性について調査・考察を加えることにした。

室の八島（大神神社）の主祭神は大己貴神であり、やはり鉾山神である。当地は古来、歌枕の地であり、「けむり」を詠み習わすこととなっている。摂社である浅間神社については、松尾芭蕉の『奥の細道』にも「此神は木の花さくや姫の神と申て富士一躰也。無戸室に入て焼給ふちかひのみ中に、火々出見のみこと生れ給ひしより室の八島と申。又煙を読習し侍もこの謂也」と記されている。細矢藤策は、タイのクメール族が高床式の産室の床下で七日間火を焚くことから、この皇子誕生譚が南方文化の産育習俗にルーツを持つ可能性を指摘している。さらに「無戸室」が竪型炉（ブルーム炉）をも意味しているのではないかと推測している。鍛造鍛冶においては炉の内部を還元状態に保つために外気との接触を防ぐ必要がある。そのために粘土によるドームで覆われ、その形態が「戸の無い室」つまり「無戸室」と考えると、たしかに皇子誕生譚と鍛造鍛冶の整合性が見えてくる。

室の八島には、明らかな人麻呂信仰は確認されないが、他の人麻呂を祀る神社と同様に環濠に囲まれ、渡良瀬川水系の思川との交通が認められる。また、室の八島がある栃木市惣社町は、下野国府跡にも近く、鋳物師内、金井など鍛冶に関係すると考えられる地名が今も残っている。

ところで、現在、室の八島のある大神神社の宮司は、栃木市平井町にある太平山神社の小林一成宮司が兼任している。太平山神社の祭神は、瓊瓊杵命、天照皇大御神、豊受姫大神であるが、『諸神座記』を始め多くの古文書によれば、垂仁天皇の御宇に大物主神、天目一大神、が三輪山（現在の太平山）に鎮座されたときに創建されたと伝えられている。小林宮司の話では、天目一箇神の古代祭祀として鍛造した鉄剣を地中に埋める儀式が60年に一回行われ、実際に前回60年前に埋められたと思われる錆びた鉄剣を見たことがあるということだった。この太平山神社の麓には、人丸神社や室の八島などがあり、やはり、古代製鉄と関係があった可能性が示唆された。

これらのことから室の八島やその周辺は、古代下野における製鉄の中心地だった可能性があり、今後さらなる精査が望まれる。

(6) 日光市の古代製鉄

2015年2月、栃木県日光市の篠井金山跡へ調査に行き、高へら山南東斜面の沢で偶然に鉄滓（写真11）を見つけた。これは磁石に強く引きつけられるため相当の鉄が含まれているものと考えられる。さらに興味深いことに、篠井金山の直ぐ近くを流れる利根川水系の黒川沿いに人麻呂神社2社が認められた。（写真12, 13）

この黒川の下流に室の八島が位置しており、日光市から室の八島にかけて、古代製鉄と人麻呂信仰の関係性が覗われた。



写真11 鉄滓



写真12 人丸神社



写真13 人丸神社 拝殿

4. まとめ

(1) 今回の調査で、東日本における人麻呂信仰に関連する社寺等の各都県別に、多い順から、栃木県に19箇所、群馬県に11箇所、東京都に11箇所が確認され、北関東、特に両毛地区に集中していることが判明した。

(2) 関東における人麻呂信仰に関連する主な社寺等は、利根川水系（利根川、烏川、碓氷川、鐙川など）や渡良瀬川水系（渡良瀬川、巴波川、思川、旗川、秋山川など）の河畔に多く分布し、また、鬼怒川水系や那珂川水系の河畔、および太平洋沿岸にも散在していることが分かった。

(3) 関東における人麻呂信仰が海路および河川（利根川水系、渡良瀬川水系、鬼怒川水系など）を経て伝播されたことが推測された。

(4) これまで人麻呂信仰と関連付けられていなかった群馬県邑楽郡板倉町の雷電神社が水人としての人麻呂信仰と深く関係していることが推定された。

(5) 関東における人麻呂信仰が航海技術や製鉄技術を持つ集団と関連し、その起源が中国南部からの渡来系文化にある可能性が推測された。

(6) 関東における古代製鉄は湖沼鉄を原料とした可能性が大きいことが推測された。

(7) 関東における鍛冶神としての人麻呂信仰と関連する古代製鉄の中心地として栃木県栃木市の「室の八島」とその周辺が推測され、今後さらなる精査が必要と考えられた。

(8) 板倉雷電神社が人麻呂信仰と深い関係にあることが推定されたことから、同社が人麻呂ゆかりの地として広く認知されることで地域文化の活性に資する可能性が考えられた。

謝辞

本研究に際して、格別なるご指導を賜りました群馬県立女子大学教授・熊倉浩靖先生にまず心より深謝申し上げます。

また、深甚なるご協力を賜りました都留文科大学教授・茂木秀昭先生、自治医科大学名誉教授・加藤直克先生、京都大学教授・鎌田東二先生、板倉雷電神社・江森隆裕宮司、太平山神社・小林一成宮司、宇都宮二荒山神社・金子宗人権禰宜、川越氷川神社・佐倉聡権禰宜に心より感謝申し上げます。

最後に、関東学を私に薦めて頂き、地域学研究のご指導を賜りました同志社大学名誉教授・森浩一先生の学恩に深く感謝申し上げます。

参考文献

1. 桜井満「柿本人麻呂関係社一覧」『柿本人麻呂論』桜楓社, 1980
2. 神田秀夫『人麻呂歌集と人麻呂伝』塙書房, 1965
3. 山内英正ほか「柿本人麻呂, 人丸を祀る神社・寺・塚一覧」『神になった人麻呂 人丸信仰の調査と報告書』犬養万葉記念館に協力する会, 2013
4. 古橋信孝『柿本人麿』ミネルヴァ書房, 2015
5. 銅版画「雷電神社之景」『上野国百景銅版画集』名古屋光彰館, 1904
6. 田島桂男「武尊神社」『日本の神々 神社と聖地 11 関東』白水社, 2007
7. 風山広雄『下野神社沿革誌』1903

8. 尾島利雄 編著『下野の伝説』第一法規出版, 1975
9. 埴静夫『うつのみや歴史探訪』随想社, 2008
10. 柳田国男『一目小僧その他』小山書店, 1934
11. 大和岩雄『人麻呂の実像』大和書房, 1990
12. 森浩一編著『日本古代文化の探求・鉄』社会思想社, 1974
13. 森浩一「生産用具の製作」『大系日本史叢書 10 産業史 I』山川出版社, 1961
14. 東京工業大学製鉄史研究会『古代日本の鉄と社会』平凡社, 1982
15. 細矢藤策『古代英雄文学と鍛冶族』桜楓社, 1989
16. 山内裕子「古代製鉄原料としての褐鉄鉱の可能性 : パイプ状ベンガラに関する一考察」『古文化談叢 70』九州古文化研究会, 2013

問い合わせ先

五島高資 <mailto:takagoto@mac.com>

樽本高壽 <mailto:takagoto@me.com>